

防衛省 防衛医科大学学校医学教育部 外科学講座（心臓血管・呼吸器） 教授就任



堤 浩二（70回相）

この度、2025年1月1日付で、防衛医科大学学校外科学講座（心臓血管・呼吸器）教授に就任しました。当講座は、心臓血管外科と呼吸器外科の2つの分野を担当しています。ご挨拶を兼ねまして自己紹介とこれからの抱負について述べさせていただきます。私は、防衛医科大学を1991年に卒業しました。初期研修終了後2年間陸上自衛隊高射学校衛生課に勤務しました。この間全国の高射部隊がアメリカ合衆国で実施するミサイル射撃訓練に支援部隊の一員として参加しました。アメリカ滞在中の基地の近くWilliam Beaumont Army Medical Centerという陸軍病院がありました。そこで開心術を見学する機会を得た事が、自分が心臓外科に進む契機となりました。95年に自衛隊を退職し国立埼玉病院で勝本先生（43回）及び新堀先生（50回）の下で心臓外科の研修を始

めました。この2年間の研修で心臓外科の基礎を教えて頂きました。97年に慶應義塾大学大学院に入学し川田志明教授指導の下4年間臨床と研究に没頭しました。2001年以降四津良平教授の指導の下、慶應関連病院で研鑽を積みました。2015年に志水秀行教授の推薦で准教授として22年ぶりに防衛医大に戻りました。この間大きく世界情勢が変わり防衛医大卒業生に要求される医療も以前とは大きく異なっていました。近年防衛医大の教官は、胸部損傷および血管損傷を含めた外傷に対する治療ができる医師の養成を要求されています。この要求に應えるため学生教育および卒業教育に医局員全員で力を注いでいます。また地域との連携を強化し地域の拠点病院としての役割を果たし、救急疾患を含めた幅広い疾患に対応できる診療体制の構築に努力しています。研究面

では、当大学免疫学講座で研究している人工血小板の臨床応用に向けた基礎研究を当科石田講師（80相当）が中心となつて行っています。また人工血小板の臨床応用に向けたmouse試験を当科で2026年度より開始することが決まっています。決して十分な人的資源がある訳ではないですが、人工血小板の実用化に向けた研究を含めて基礎および臨床研究をこれからも進めていく所存です。私が防衛医大に戻ってから10年が経過しましたが、この間少しずつ心臓血管外科および呼吸器外科を志す後輩が増えています。防衛医大という特殊な環境ではありますが、一人でも多くの後進を育てられるよう努力して行く所存です。私はこれまで、慶應義塾大学関連施設で多くの事を学ぶ機会を得ました。今まで温かくご指導を頂いた義塾の関係者の皆様にこの場をお借りして

心より御礼申し上げます。そして私が慶應で学んだことを一人でも多くの後進に伝えることが、私に課せられた使命だと考えています。当講座の更なる発展に向けて教育・臨床・研究それぞれの分野で精いっぱい努力して参ります。これからもご指導ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

東京歯科大学市川総合病院 外科学講座 教授就任



瀧川 穰（74回）

2024年12月付で、東京歯科大学市川総合病院外科学講座教授を拝命いたしました。身に余る光栄とともに、その責務の重さに身の引き締まる思いです。東京歯科大学は、1890年（明治23年）に創設された私立歯科医学校を起源とし、1946年（昭和21年）に日本初の歯科大学となり、以来、歯科医学領域における卓越した教育および研究実績を築いてきました。市川総合病院は、同年に東京歯科大学の附属医療機関として開院、現在では26の診療科と9つの専門センターを擁する511床の総合病院として、地域医療の中核を担いつつ、高度医療・教育・研究の三本柱を堅持しております。

外科学講座は、1949年の創設以来、堅実な伝統と実績を築き、1967年より加藤繁次教授、1992年より吉野肇一教授、2000年より安藤暢敏教授、2008年より松井淳一教授、そして2020年より長谷川博俊教授へと継承されていきます。私もこのたび、長谷川博俊主任教授とともに、本講座のさらなる発展に寄与できるよう尽力する所存です。歴代の先生方のご指導により、本講座では消化器がんを中心に、拡大手術から臓器温存術式、さらには鏡視下手術およびロボット支援手術に代表される低侵襲手術に至るまで、多岐にわたる臨床と研究を通じて大きな進展を遂げてきました。

私自身はこれまで、肝胆膵疾患を中心とした外科診療に従事し、臨床および研究に研鑽を重ねてまいりました。日本肝胆膵外科学会の高高度技能専門医修練施設として、多くの高難度肝胆膵手術に真摯に取り組みつ、若手外科医の育成にも尽力しております。研究面においては、膵頭十二指腸切除後の残膵機能評価、膵管内乳頭粘液性腫瘍（IPMN）切除後の二次発がんの予測、膵癌の早期発見手法の開発などに注力しており、特に「膵形態的変化不適合（膵くびれ）」による早期癌発見の研究」においては、第35回日本肝胆膵外科学会総会にて理事長賞を賜る栄誉をいただきました。今後は、これまで培ってきた経験・技術と知見をもとに、外科学講座が医療、教育、研究の各面において、一層社会に貢献できるよう全力を尽くす所存です。臨床では、安全かつ温かな高度医療の提供をおこない、教育では次世代を担う優れた外科医の育成に力を注ぎます。また、研究では国際的な視野を持ち、臨床と基礎医学をつなぐ架け橋となりえる成果の創出を目指してまいります。

加えて、昨今の医療界を取り巻く厳しい経済状況の中、当院もまた例外ではありません。こうした状況の中、なかで、外科が中心となつて各診療科の連携を促進し、病院全体を牽引してゆくことで、この困難を乗り越えてゆく所存です。最後に、東京歯科大学市川総合病院、ならびに慶應義塾大学外科学教室のさらなる発展のため、微力ながら尽力してまいる覚悟です。これまで本講座を支えていただいた刀林会の諸先生方に、心より敬意と感謝の意を表しますとともに、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

埼玉医科大学 国際医療センター呼吸器外科 教授就任



菱田 智之（77回相）

刀林会の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。このたび、2025年4月1日付けで、埼玉医科大学国際医療センター呼吸器外科 教授・運営責任者・診療部長を拝命致しました菱田智之と申します。この度の着任に際しましては、刀林会の諸先生方に多大なるご支援を賜り、心より御礼申し上げます。

私は1998年（平成10年）、名古屋大学を卒業後、主に国立がんセンター中央病院・東病院にて研鑽を積んで参りましたが、がんセ

ンター中央病院時代の恩師である浅村尚生前外科学（呼吸器）教授のご高配により、2017年1月より刀林会の末席に加えて頂きました。他大学出身、かつ途中入会という立場から、当初は慶大外科の伝統と格式に畏れを感じておりましたが、皆様方のご支援のお蔭で直ぐに馴染むことができ、臨床の他、学生教育、多施設共同研究、国内外の学会準備など、多くの貴重な経験を積ませて頂きました。慶應では浅村尚生教授・朝倉啓介教授のご指導の下、8年3か月間お世話になりましたが、医師としても人間としても幅を広げることが出来た貴重な期間であったと実感しております。改めて深

甚なる感謝を申し上げます。埼玉医科大学国際医療センターは、同大学が擁する大学附属3病院（大学病院（毛呂山）、総合医療センター（川越）、国際医療センター）の1つで、埼玉県西部の日高市に位置しております（大学病院からは車で10分程度の距離です）。当院は大学病院でありながら、がん・心臓病・脳卒中・救急医療に特化した病院として2007年に開院されました。呼吸器外科は元々、第一外科の一部門として大学病院に属しておりましたが、センター開院に伴い当地へ移動し現在に至っております（現在、毛呂山の大学病院に呼吸器外科はありません）。私は、初代 金子公一教授

（東北大学出身）、二代目 石田博徳教授（自治医科大学出身）に続く三代目教授として着任いたしました。刀林会出身者の当科着任は私が初めてですが、同門として、小児心臓外科に鈴木孝明教授（副院長）、心臓血管外科に吉武明弘教授（副院長）がおられ、着任前から多大なるお力添えを賜り、大変心強く感じております。当科は埼玉県西部の基幹施設として、肺癌のほか呼吸器外科全般の手術を年間約400件実施するregional volume centerであり、その責任者を拝命したことは身の引き締まる思いです。私の使命は、当科の実績を、質・量両面でさらに発展させ、全国有数の施設にする

ようですが、若手医師に魅力的な教室作りを目指して参ります。また、刀林会同門である、河野光智教授率いる本学総合医療センター呼吸器外科（川越）とも勉強会を行うなど緊密に連携を取り、埼玉医大ワン・チームとして学術的な発信を強化して参りたいと存じます。未だ若輩の身ではございますが、刀林会の諸先輩方におかれましては今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

浜松医科大学第一講座 （心臓血管外科・呼吸器外科・一般内視鏡外科・乳腺外科） 教授就任



岡本 一真（78回）

2024年11月1日付けで浜松医科大学外科学第一講座教授を拝命しました岡本一真と申します。この度の身に余る重職への就任にあたり刀林会員の皆様から

手厚いご指導を賜りましたことに、心より感謝申し上げます。この度の就任に際し、多くの先生方からの温かいご支援に改めて感謝し、刀林会の伝統と絆の深さを再認識した次第です。

浜松医科大学外科学第一講座は、心臓血管外科、呼吸器外科、一般内視鏡外科、乳腺外科を担当し、それぞれが活発な臨床活動と最先端の研究を展開しております。また、静岡県内の多数の基幹病院への外科医派遣を通じて、地域医療への貢献にも尽力しています。開学と同時に、東京大学から吉村敬三先生が赴任し開設され、以来4代の教授を経て、私が5代目ですが刀林会員としては初めての就任です。

浜松医科大学外科には、今野弘之先生、竹内裕也先生と坊岡英祐先生が在籍されて、初めて仕事する浜松の地でも大変心強く感じています。外科学第二講座は慶應義塾から赴任した阪口周吉先生により開設され、以後、馬場正三先生、中村達先生、今野弘之先生、竹内裕也先生と刀林会員により歴代教授のバトンが渡つてきました。この度、開学以来初めて外科学両講座のリーダーを刀林会員が務めることになりチームレスで強力な連携が期待されております。共に運営する外科専門医修練システムや静岡県の外科学を強固なものにする基盤構築をスピード感をもって前進させます。

私は、1999年（平成11年）に塾医学部を卒業した78回生です。北島政樹教授の強力なリーダーシップのもと内視鏡外科や生体肝移植などの拡大にエネルギーに満ちていた外科学教

室に入局後、大学と大田原赤十字病院、国立霞ヶ浦病院において外科修練と救急医療に従事しました。刀林会の先輩方から、外科医と学術の基礎を叩き込んで頂きました。2002年に心臓血管外科に帰室、同時に大学院に入学しました。大学と済生会宇都宮病院での修練に加え、国立成育医療センター研究所生殖医療研究部における幹細胞研究により学位を取得しました。2007年からOLV Clinic（ベルギー）、Policlinico San Donato（イタリア）、Chiang Mai University（タイ）における海外修練に出かけました。この経験が心臓血管外科医としての基盤となり、また、内視鏡下心臓手術をじっくり学ぶことが出来ました。海外修練に様々なご支援を頂きました四津良平名誉教授に改

めて感謝いたします。2011年に慶應義塾大学に帰室し臨床、研究、教育に従事いたしました。四津良平先生、加藤木利行先生、上田敏彦先生、申範圭先生、饗庭了先生、古梶清和先生、工藤樹彦先生、志水秀行先生のご指導のもと、弁膜症手術、冠動脈手術を中心に心臓外科医の基礎固めができました。同時に、低侵襲内視鏡下心臓手術のシステム基盤構築や手術機器開発に従事しました。志水秀行教授のご高配により、2016年に愛仁会明石医療センター心臓血管低侵襲治療センター長として市中病院におけるチームメーキングの貴重な機会を頂きました。2021年に近畿大学心臓血管外科准教授として再びアカデミアの道を歩むことになり、現職に至ります。

私の使命は、心臓血管外科を中心に浜松医科大学外科チームのアクティビティを向上し、地域の外科医療に貢献することです。一方、人口約350万人を要する静岡県には医師養成機関が一つしか存在せず、県内の外科医療、外科医育成を浜松医科大学外科学講座が一手に引き受けています。これまでのご尽力により、浜松医科大学は外科専門医修練プログラム参加者を確保できています。慶應外科には及びませんが、多数の良質な外科医育成を実現して参ります。

至らぬ所も沢山ありますが、精一杯努力して参ります。引き続き刀林会の先生方からのご指導の程どうかよろしくお願い申し上げます。

北里大学医学部上部消化管外科学 診療教授就任



熊谷 厚志（81回相）

このたび、2024年1月1日付で北里大学医学部上部消化管外科学診療教授を拝命いたしました熊谷厚志でございます。新たな職責をお受けするにあたり、これまでご指導くださった先生方、また支えてくださった皆様に、心より御礼申し上げます。

私は2002年に東京慈恵会医科大学を卒業後、慶

應義塾大学医学部外科学教室に入局いたしました。大学での1年間の研修の後、JA神奈川県厚生連伊勢原協同病院および静岡市立清水病院にて臨床経験を積み、2005年に大学に帰室いたしました。その後、北川雄光教授、才川義朗先生のご指導のもと、「炎症と癌」をテーマに研究を進め、博士号を取得いたしました。

2009年には、慶大外科から初めて、がん研有明病院消化器外科に出向し、年間700例を超える胃癌手術が行われるsuper high volume centerにて、山口俊晴先生、佐野武先生のご指導のもと、3年間臨床に従事いたしました。2012年からはスウェーデン・ストックホルムのカロリンスカ医科大学に臨床留学し、

食道癌・胃癌に対する内視鏡手術の導入に取り組みました。2014年にはがん研に復帰し、比企直樹胃外科部長（当時）のもとで年間100例前後の胃癌手術を執刀してまいりました。

2022年には、カロリンスカ時代に築いたご縁から、ノルウェー・ベルゲンのハウケランド大学に特別顧問として招聘され、ロボット手術を中心とする消化器癌手術の指導にあたりました。Diversity先進国である北欧2か国での臨床経験は、外科医として、また一人の人間としての在り方を見つめ直す貴重な機会となったと自負しております。

2023年8月には、北里大学医学部上部消化管外科学に准教授として着任いたしました。渡邊昌彦前教授（58回）が大きく発展させてこられた北里大学医学部外科学教室に勤務できることを、大変光栄に存じます。

現在、比企直樹先生（上部消化管外科学主任教授）、隈元雄介先生（69回、一般小児・肝胆膵外科学主任教授）、内藤剛先生（下部消化管外科学主任教授）、三階貴史先生（乳腺・甲状腺外科学主任教授）をはじめとする諸先輩方のご指導のもと、若手外科医の育成および学生教育に尽力しております。

今後は、これまでに培ってきた知見と経験を基に、安全で質の高い外科医療の実現に貢献するとともに、次世代外科医の育成、さらには多様性を受け入れた新しい外科医の働き方の実現に向けて、力を注いでまい

国際医療福祉大学三田病院 消化器センター 消化器外科部長 病院教授就任



新原 正大（83回）

2024年10月に国際医療福祉大学三田病院に赴任し、現職を拝命いたしました新原正大でございます。

就任にあたり、多大なるご高配を承りました慶應義塾大学医学部一般・消化器外科教授北川雄光教授、刀林

会の諸先生方、そしてこれまでご指導いただいた諸先輩方に心より厚く御礼申し上げます。国際医療福祉大

学三田病院は現在、慶應義塾大学一般・消化器外科学から院長池田佳史先生、消化器センター長・病院長補佐星本相淳先生が赴任されており診療、教育、研究に励んでおります。

2024年4月より医師の働き方改革が始まり、時代が変わりつつある中、消化器外科学の素晴らしい魅力を伝え、また慶應義塾大学医学部一般・消化器外科学の発展に尽力し、慶應義塾大学、国際医療福祉大学、そして地域医療に貢献してゆきたいと考えております。

診療面ですが、当院ではセンター方式が採用されており、消化器センターでは内

科・外科の垣根が低く、バランスの取れたチーム医療が提供されていると感じております。そして、このような恵まれた環境の中で次世代の外科医を育てていくことも重要な責務と考えております。甚だ微力ではございますが国際医療福祉大学、慶應義塾大学の発展のため全力を尽くしてまいりますので、なにとぞ倍旧のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

院長就任

さいたま市立病院 院長就任



朝見 淳規（66回）

この度、さいたま市立病院院長を拝命いたしました朝見淳規と申します。

私は、1987年に慶應義塾大学を卒業し、外科学教室に入局、大学での1年間の研修のち、済生会神奈川県病院で吉井弘先生（53回）、北野光秀先生（59回）にご指導いただき、次の1年間は浦和市立病院（現さいたま市立病院）で戸倉康之先生（41回）、山藤和夫先生（55回相当）、松本賢治先生（56回）の指導による外科研修を受けさせていただきました。

その後大学に戻り、一般消化器外科 血管班に所属し、折井正博先生（52回）のご指導のもと、多くの血管外科手術を学ばせていただきました。4年間、臨床、研究に励み、その後は現在のさいたま市立病院に戻り31年間勤務させていただきますいております。

さいたま市立病院は、令和元年12月29日に病院新棟が完成し、病院機能がさらに充実しました。病床数も

637床となり、令和2年12月には救急救命センターが開設され救急医療が飛躍的に充実しました。さらに、ロボット手術や高精度放射線治療装置の導入により最先端のがん治療、生育母子医療センターとして周産期から小児期まで一貫した医療サービスを提供できる医療体制が整い、精神科身体合併症病棟の新設、感染症専門の外来や病棟なども整備されました。加えて、令和5年5月より、運動・スポーツ領域に特化したスポーツ医学総合センターを開設し、スポーツ外傷の診療とともに、さいたま市民の健康増進にも力を注いでいます。

新型コロナウイルス感染症のパンデミックに際しては、新病院の機能を十分に発揮し、全職員一丸となつて多くの患者様を受け入れさせていただくことができました。パンデミックも収束し、新病院もようやく通

常運用が可能となり、本来の実力を発揮してまいりたいと考えております。公立病院であり多くの不採算部門を運営し、材料費、光熱費、人件費高騰などにより非常に厳しい状況ではありますが、経費削減などで健全な経営状況を目指して一層の努力をして参ります。

当院は市民の皆様に信頼される病院として、市民により良い医療を提供するとともに、慶應義塾大学病院に帰院する研修医、専攻医の教育にも今まで以上に貢献してまいります。今後ともよろしくお願い申し上げます。

済生会宇都宮病院 院長就任



篠崎 浩治（68回）

このたび、2025年4月1日付で第9代済生会宇都宮病院院長を拝命いたしました。当院には、刀林会の先輩方として、第3代院長の故・梅園明先生（32回）および第7代院長の小林健二先生（55回、現・栃木県済生会支部支部長）が在任されており、私もその系譜を継がせていただくこととなりました。私は1989年に大学を卒業後、外科学教室に入局し、所定の研修を経て、3年間の米国留学を経験したのち、2000年5月より済生会宇都宮病院に勤務しております。約18年間にわたり外科診療科長を務め、2020年4月からは副院長・統括診療部長として、COVID-19対応など病院運営に携わってまいりました。この間、故・梅園明先生、小林健二先生のもと、外科研修（1991年）にとどまらず、病院経営や地域医療の在り方についても多くを学ばせていただきました。

当院は1942年（昭和17年）に宇都宮市で開院し、「医療を通じて地域社会に貢献し、地域と共に進化する」を基本方針に、着実に発展してまいりました。1981年（昭和56年）には栃木県救命救急センターの運営を受託、1996年（平成8年）には現在の宇都宮市竹林町へ移転し、現在では、32診療科、医師数220名（初期臨床研修医24名）、病床数644床を有する高度急性期病院として、地域医療の中核を担っております。栃木県救命救急センター、地域がん診療連携拠点病院、基幹災害拠点病院、地域周産期母子医療センターの指定を受けるとともに、がんゲノム医療や生殖補助医療（顕微授精）、循環器疾患に対するTAVI（経カテーテル的大動脈弁留置術）、大動脈疾患へのステントグラフト内挿術（EVAR・TEVAR）、およびロボット支援手術（消化器外科、呼吸器外科、泌尿器科、婦人

科）、心臓外科領域における低侵襲手術など、低侵襲・先進的治療に取り組んでおります。また、新生児集中治療室（NICU/GCU）、高度集中治療室（ICU/CCU）、救急集中治療室（HCU）を備え、一般病床に加え、緩和ケア病棟やパースセンター（院内助産所）を設置することで、総合的な医療体制を整えています。特にICU/CCUにおいては、重症の呼吸不全や循環不全症例に対し、ECMO（体外式膜型人工肺）を用いた専門的な先進治療を行っています。

宇都宮市の人口は2024年時点で約51万人ですが、2018年の52万人をピークに減少傾向にあり、2050年には約45万人に減少することが予想されています。今後10年間は高齢者医療、高齢者救急医療の需要が高まる一方で、その後の医療需要の急速な減少も見込まれ、また疾患の複合化・複雑化がさらに進むことか

ら、急激な社会の変化に対応すべく、当院では「病院完結型医療」から「地域完結型医療」への転換を目指し、地域医療機関との連携を今後一層強化して行きたいと考えております。また、安定的かつ質の高い医師の確保に向けて、慶應義塾大学医学部との関係強化にも取り組んでまいりたいと存じます。

「患者が必要とする時に、必要な医療を提供する」ことが、私たちの病院の使命と考えております。これからも地域社会から信頼される病院を目指し、職員一同、全力で取り組んでまいれる所存です。

刀林会会員の諸先生方におかれましては、今後とも変わらぬご指導・ご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

この四月以降病院長としての重圧の中で、新たな業務や経営に関する様々な数字と日々格闘していますが、多くの病院職員や院外の方々と話す機会が増え、新しいことにチャレンジできるワクワク感や楽しさも感じています。幸い時間を見つけて手術にも入らせてもらっていて、外科医としての矜持を保てるのはありがたいと思っています。

若輩かつ浅学菲才の身ではございますが、これまで

このたび令和七年四月一日付をもちまして国立大学法人浜松医科大学医学部附属病院病院長を拝命いたしました71回生 竹内裕也でございます。

私は平成四年に慶應義塾大学医学部を卒業後、故北島政樹名誉教授のご指導の下で、慶應義塾大学病院や関連施設において臨床、研究、教育の研鑽を積む貴重な機会を頂いた後に、平成二十九年三月一日より浜松医科大学医学部外科学第二講座（消化器・血管外科学分野）に教授として着任いたしました。浜松医科大学外科学第二講座は初代教授故阪口周吉先生（30回）、二代目 故馬場正三先生（36回）、三代目 中村達先生（元浜松医科大学長（49回）、四代目 今野弘之先生（前浜松医科大学長）（57回）、そして五代目が私と、国立大学にありながら五代続けて慶大外科より教授を輩出した教室であります。令和二年四月からは医療安全担当の



竹内 裕也（71回）

副病院長を拝命しておりますが、この度病院長の職務を与えられました。これまでのご指導とご厚情を賜りました今野弘之前学長、北川雄光教授をはじめ、刀林会の諸先輩方にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

医療を取りまく環境は厳しさを増しており、現在全国の国立大学附属病院の大半が赤字収支となっておりま

学長退任

浜松医科大学学長を退任して



今野 弘之（57回）

2025年3月をもって、9年間の浜松医科大学長の任期を満了しました。理事、副学長など関係者の多大な尽力のお陰で、一言でいえば「楽しく」務めさせて頂きました。私学出身の国立大学学長は極めて珍しいのですが、本学では前中村達学長（49回）と私が慶大外科学出身として2代に渡り務めました。いろいろな機会に刀林会や三四会の先生方から暖かいご支援を賜り、心から御礼申し上げます。

次医学科・看護学科のアンブレレナー教育や医学科6年間を通した英語教育、心理などの行動科学、医療倫理教育など新カリキュラムを導入しました。英語力の向上に伴い、コロナ禍後海外での臨床実習等を希望する医学生が格段に増えました。大学院教育としては医学科では海外からの学生が増加し、現在では学術協定校を主体とした選抜を行っております。2025THE

評価し、公平に選考することがカルチャーとなつていますが、竹内第2外科教授（71回、今年度から病院長）、前川第3内科教授・副病院長（74回）、宮入小児科教授（74回）、岡本第1外科教授（78回）という魅力溢れる優れた教授の就任で、本学における慶應出身者の評価は極めて高く、大学運営の要を担っています。静岡県は352万の人口を有し全国でも有数の経済力を誇る地域ですが、医育機関は本学のみですので医師少数県です。しかし、地元出身の優秀な卒業生が多く、県内定着率も高いため、医師偏在指数も徐々に改善しています。また、現在の日本医師会会長、県医師会長、浜松市医師会長は本学卒業生ですが、県内病院長も医局関係者が多く、地方を代表する医科大学として我々のミッションである教育、研究、社会貢献の責務を果たすための環境は整いつつあります。今後とも刀林会の先生方のご理解とご支援を賜われば幸いです。

院長退任

国際親善総合病院 病院長退任



安藤 暢敏（50回）

去る3月末をもって国際親善総合病院病院長を退任いたしました。2015年4月に就任し、在任期間10年間の前半は、緩和ケア病棟の開設、産科分娩の再開、サテライトクリニックの新設、大型医療機器の更新など、急性期病院として攻めの姿勢で病院運営に臨みましたが、後半は新型コロナウイルスパンデミックと共に始まり、コロナ禍に翻弄されクラスター対応の病棟ゾーンングやPPE確保など、平時には思いもよらない守りの期間でした。緊急事態宣言下で街から人影が消え、得体の知れない不安感が覆っていたのはわずか5年前でした。

私は当院入職前に東京歯科大学市川総合病院病院長を6年間務めました。両病院とも急性期病院ながら前職は医育機関、後は社会福祉法人内の民間病院なので、背景が大いに異なる2病院の病院長を体験し得ました。前職は全診療科医師が慶應（一部慈恵）の医局人事に対し、親善は3／4が慶應および横浜市大を主

とした医局人事で、1／4は主として業者紹介による現地採用でした。給与ベースは前職では大学基準の制約のために人件費比率は自ずから45％前後と比較的低値に抑えられましたが、親善では55％が達成できれば何とか黒字化となり、直近では58％超となつてしまいました。前職では私学助成金など年間3億の補助金がありました。親善では公費補助金は救急搬送を年間5,000件応需しても横浜市中からの2,000万のみでした。従つて病院長として最も腐心したのは前職では患者数確保、親善では常勤医師数の確保でした。コロナ禍での病院財政はコロナ関連補助金で一息つける時期もありましたが、コロナ後はむしろ患者数減少、働き方改革などによる人件費の増加、諸物価上昇などの三重苦が重くのしかかり、それに対し診療報酬改定は全く対応せず、メディア報道にもあるように病院経営は大変厳しいフェーズに入っています。このような状況下で当院の規模と機能

良質。均質。ツムラ品質。

生薬には、個性がある。

漢方製剤にとって「良質」とは何か。その答えのひとつが「均質」である、とツムラは考えます。自然由来がゆえに、ひとつひとつに個性がある生薬。漢方製剤にとって、その成分のばらつきを抑え、一定に保つことが「良質」である。そう考える私たちは、栽培から製造にいたるすべてのプロセスで、自然由来の成分のばらつきを抑える技術を追求。これからもあるべき「ツムラ品質」を進化させ続けます。現代を生きる人々の健やかな毎日のために。自然と健康を科学する、漢方のツムラです。

株式会社ツムラ <https://www.tsumura.co.jp/> 資料請求・お問合せは、お客様相談窓口まで。

医療関係者の皆様 tel.0120-329-970 患者様・一般のお客様 tel.0120-329-930 受付時間 9:00～17:30（土・日・祝日は除く） 2021年4月制作

受賞報告

福澤賞、SGH特別賞を受賞して



慶應義塾 副学長 常任理事
医学部外科学(一般・消化器)
教授

北川 雄光 (65回)

2024年11月「がん集学的治療法の開発研究による国民福祉と健康への貢献」というテーマで栄えある福澤賞を受賞することができました。福澤賞は、慶應義塾の教員の中で学問水準の向上に寄与する研究業績を挙げた者に贈られる学術賞とされています。慶應義塾学事振興資金により、1949年より毎年表彰が行われており、2024年に法学部教授 太田達也さんとともに受賞することができました。これまでにも歩んでくれた教室員、学内外で多くの研究をサポートしてくださった皆様、受賞に際してご推薦をくださいました。また、2024年12月、金井医学部長のご推薦

ました金井医学部長はじめ多くの皆様に心より感謝申し上げます。今回、義塾賞を受賞された医学部皮膚科学教授 天谷雅行さんと一緒に三田の演説館で受賞のご挨拶をさせていただけたことも生涯の思い出になりました。また、2024年12月、金井医学部長のご推薦

で、「食道癌に対する集学的治療、低侵襲治療の開発研究」を対象としてSGH特別賞を授与されました。SGH特別賞は、がんの研究者及び医療従事者の励みとなることを目的として、がんの基礎、臨床研究に顕著な功績を挙げた者を対象に、基礎、臨床部門1名ずつが表彰されます。本年は、エクスソーム研究の第一人者であられる東京医科大学医学総合研究所 特任教授落谷孝広先生とともに受賞できました。

私は普通部入学以来、50年余り慶應義塾の一員として過ごす中で、多くの方々と出会い、多様な経験をさせていただきました。中でも私が今日に至るまで外科医として歩むきっかけとなったのが、医学部6年生の夏、国際医学研究会南米派遣団の一員として南米各地で過ごした経験です。アマゾン奥地の村をたった一

人を守る医師とともに、初めての分娩や虫垂炎、外傷患者の手術を体験し、医療の原点はまず、自らの手を動かして患者さんの命と向き合うことであると感じ外科医を志しました。私が外科医になったばかりの頃は、すでに外科治療ができない一定のレベル以上に進行したがんの患者さんには、有効な薬物療法もなく、治療法を提示することすらできないという時代でした。しかし、現在は手術療法だけでなく様々な癌治療法が開発され、たとえ初診時に切除不能進行癌であっても、自信を持つて「今はいい治療がたくさんあります。それらを組み合わせる最適なタイミングで我々が手術をします」と言える時代が到来しました。私たちの仕事は、地道な臨床試験を積み重ねて一步一步標準治療を変えていくことです。一つの臨床試験から結果を得る

までには10年以上の時間がかかることも稀ではありません。その臨床試験の結果が出る頃に、その結果がどのような意味を持つのかをしつかり考えて試験を計画し、世界中の多くの研究者とともに、新しい医療を作

り出すために貢献してくださる患者さんやそのご家族のご協力をいただいて今日まで歩んでまいりました。今や外科手術だけでなく立ち向かう時代ではなくなりました。明日の医療を切り開く基礎研究者も含めて、多くの専門家が叡智を結集して命と向き合う時代になりました。定年退職を目前にこのような栄誉に浴することができたのも私を今まで支えてくれた教室員の皆様、刀林会の皆様のご支援の賜物であり、あらためて心より感謝申し上げます。誠にありがとうございます。

人では10年以上の時間がかかることも稀ではありません。その臨床試験の結果が出る頃に、その結果がどのような意味を持つのかをしつかり考えて試験を計画し、世界中の多くの研究者とともに、新しい医療を作

り出すために貢献してくださる患者さんやそのご家族のご協力をいただいて今日まで歩んでまいりました。今や外科手術だけでなく立ち向かう時代ではなくなりました。明日の医療を切り開く基礎研究者も含めて、多くの専門家が叡智を結集して命と向き合う時代になりました。定年退職を目前にこのような栄誉に浴することができたのも私を今まで支えてくれた教室員の皆様、刀林会の皆様のご支援の賜物であり、あらためて心より感謝申し上げます。誠にありがとうございます。

のかを共に考える、意義深い機会となることを願ってやみません。多くの皆様にご参集いただき、活発な意見交換と交流を通じて、実り多いシンポジウムとなりますよう、鋭意準備を進めてまいります。

学会紹介

第42回日本小児外科学会
秋季シンポジウム



国際医療福祉大学
成田病院小児外科 教授
渕本 康史 (66回)

このたび、第42回日本小児外科学会秋季シンポジウム・PSJM2026を、2026年10月29日(木)から31日(土)にかけて、東京都千代田区一ツ橋の一橋大学一橋講堂にて開催させていただきます。いただく運びとなりました。

開催初日の29日および30日に、日本小児内視鏡外科・手術手技研究会、日本直腸肛門奇形研究会、日本小児

外科漢方研究会、日本小児外科代謝研究会、日本小児呼吸器外科研究会の5つの研究会が、それぞれの会長のもとに開催され、最終日の31日に日本小児外科学会秋季シンポジウムを執り行います。日本小児外科学会における重要な位置づけにある本シンポジウムを主催させていただけることは、大変光栄であり、身の引き締まる思いで準備を進めております。

今回のシンポジウムの主題は「小児外科領域における最新技術の応用」といたしました。AIによる診断支援や治療計画の立案、術中ナビゲーション、VRを用いた教育手法の進化など、

今回のシンポジウムの主題は「小児外科領域における最新技術の応用」といたしました。AIによる診断支援や治療計画の立案、術中ナビゲーション、VRを用いた教育手法の進化など、

今回のシンポジウムの主題は「小児外科領域における最新技術の応用」といたしました。AIによる診断支援や治療計画の立案、術中ナビゲーション、VRを用いた教育手法の進化など、

今回のシンポジウムの主題は「小児外科領域における最新技術の応用」といたしました。AIによる診断支援や治療計画の立案、術中ナビゲーション、VRを用いた教育手法の進化など、

血液凝固阻止剤
アコアラン® 静注用1800
600国際単位、1800国際単位/バイアル
ACOALAN Injection アンチトロンビン ガンマ(遺伝子組換え)静注用
[生物由来製品] [処方箋医薬品³⁾] [薬価基準収載]
(注意)医師等の処方箋により使用すること

※効能又は効果、用法及び用量、禁忌を含む注意事項等情報については電子化された添付文書をご参照ください。

製造販売元
協和キリン株式会社
東京都千代田区大手町1-9-2
販売元
一般社団法人
JB 日本血液製剤機構
東京都港区芝浦3-1-1

ACO-202410

[文献請求先及び問い合わせ先]
日本血液製剤機構 くすり相談室 〒108-0023 東京都港区芝浦3-1-1 医療関係者向け製品情報サイト <https://www.jbpo.or.jp/med/di/>

抗悪性腫瘍剤
劇薬、処方箋医薬品(注意一医師等の処方箋により使用すること)

ロンサーフ® 配合錠 T15 T20
Lonsurf® combination tablets
トリフルリジン・チピラシル塩酸塩配合錠 [薬価基準収載]

文献請求先及び問い合わせ先
大鵬薬品工業株式会社
〒101-8444 東京都千代田区神田錦町1-27
TEL.0120-220-4527 <https://www.taiho.co.jp/>

製造販売元 **TAIHO**

効能又は効果、用法及び用量、警告・禁忌を含む注意事項等情報等は電子添文をご確認ください。

2023年5月作成

第62回日本移植学会総会



東京医科大学八王子
医療センター 副院長
消化器外科・移植外科
主任教授
河地 茂行（68回）

刀林会会員の皆様においては平素より格別のご高配を賜り厚く御礼申し上げます。この度、第62回日本移植学会総会を、東京都新宿区の「京王プラザホテル（KEIO PLAZA HOTEL TOKYO）」にて、2026年9月10日（木）、11日（金）、12日（土）の3日間の日程で開催することになりました。歴史ある本学会総会を主催させて頂いたことは身に余る光栄なことと存じております。

本学会はその名の通り、我が国で行われているすべての移植医療について現状と課題を熱く議論する場であり、移植医療に携わる医療従事者にとって根幹に位置付けられる学会です。刀林会としては、2014年に第50回総会を東京医科大学八王子医療センター消化器外科・移植外科の前主任教授であった島津元秀先生（53回）が開催されて以来、2度目の開催になります。私（68回）が移植医療の

道に入ったのは1992年5月に慶應義塾大学外科のレジデントとして胆道班（現在の肝胆膵・移植班）を選んだ時からでした。当時慶大外科の進む道として故北島政樹教授（45回）が掲げていた3本柱の一つが生体肝移植の実施であり、臨床の実現にむけ豚を使った肝移植の基礎研究に島津先生の指導のもと没頭しました。1995年4月に慶大外科第一例目の生体肝移植が実施された日は忘れ難い思い出となりました。その後生体移植が我が国で広く普及する一方で脳死移植の停滞が続く、母校の脳死移植を見ないまま東京医科大学八王子医療センターに移りました。停止していた生体肝移植プログラムの再開だけでなく、腎移植・膵移植、臓器提供等にも触れ、移植医療の素晴らしさと直面する課題への視野が大きくなり広がったと自負しております。

本学会のテーマを「移植医療の醍醐味を伝える」とさせて頂きました。移植医療の持つ素晴らしさ、直面する患者・家族のドラマ、移植医や関わるすべての医療従事者のプライド・矜持など、総じて移植医療の持つ醍醐味であり、これを患者さんだけでなく、後進の医療従事者や社会に伝えていくことが我々の責務だと思います。このテーマを選びました。移植医療を支えるすべての学会員の皆様が、自らが感じる醍醐味を語り繋いでいっていただければ望外の喜びです。

季節はまだまだ厳しい残暑の中となりますが、それ以上に熱い議論が繰り広げられ記憶に残る総会になることを心より祈念して本学会の紹介とさせて頂いたと思います。刀林会会員の皆様には、温かいご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2024年11月7日（木）から8日（金）の2日間、京王プラザホテル（新宿）において、第31回日本神経内視鏡学会を開催いたしました。本学会の開催にあたり、刀林会の皆様から多大なるご支援を賜り、成功裏に終りましたことをご報告申し上げますとともに、心より御礼申し上げます。

日本神経内視鏡学会は、脳神経外科において低侵襲化を牽引する重要な学会の一つです。医療機器と技術の進歩に伴い、様々な神経内視鏡手術が開発されました。最近では、高精細な内視鏡および外視鏡を各種アプローチに用いることにより、さらなる低侵襲手術への貢献および発展が期待されています。一方、広く普及し、時代を経て受け継がれていく技術や術式は、多くの術者が安全に施行できる有効な手術のみです。10年先の将来を見据えて、今回のテーマは、「未来の手術――さらなる挑戦――」といたしました。

国際的エキスポパートによる卓越した技術や思考を学ぶ機会として、IFNE（International Federation of Neuroendoscopy）理事長 Alvaro Cordoba 教授（ウルグアイ）‘IFNE次期会長 Stefan Wolfsberger 教授（オーストリア）’、Joachim Oertel教授（ドイツ）’Sandi Lam教授（米国）をお招きし、IFNE Satellite Symposium を併催いたしました。また、Doo-Sik Kong教授（韓国）には近年注目を集める新たな手術法（経眼窩アプローチ）について、須田康一教授（藤田医科大学消化器外科）にはロボット支援手術と外科医療DXに関する講演を賜り、神経内視鏡手術の将来に向けて貴重なヒントをいただきました。

神経内視鏡手術の今後の課題として、安全で有効な手術の確立に向け、「標準化」をテーマに多岐にわたる議論が行われました。また、学会の国際化に向けた試み

学会を終えて

第31回 日本神経内視鏡学会



慶應義塾大学医学部
外科学（脳神経）教授
戸田 正博（66回）



第31回
一般社団法人

日本神経内視鏡学会

未来の手術 ―さらなる挑戦―

第42回 日本脳腫瘍学会学術集会 開催報告



藤田医科大学
脳神経外科 教授
廣瀬 雄一（66回）

第42回 日本脳腫瘍学会学術集会を2024年12月1日(日)から12月3日(火)までの3日間、三重県志摩市のグランドメルキュール伊勢志摩リゾート&スパにおいて開催致しました。本学術集会には、特に悪

性脳腫瘍の治療と研究に携わっている多分野の医師、研究者が参加しますが、今回も310余の演題応募がありました。希少疾患と言える脳腫瘍研究に特化した学会としては、盛会であつたと考えています。私に縁

のあるMichel S. Berger先生、Russell O. Pieper先生、岡田秀穂先生（いずれもUniversity of California San Francisco）の他、慶

應でも活躍された佐谷秀行先生（藤田医科大学 研究推進本部 腫瘍医学研究セ

ンター）、大須賀寛先生、橋詰倫太郎先生（いずれもUniversity of Alabama at Birmingham）に特別講演を行なつて頂きました。それぞれの先生が教育的意義もある貴重な講演をしてくださつたと感謝しております。

また、脳腫瘍学会の会員は大半が脳神経外科医ですが、他領域の先生方にも学会運営に加わつて頂くべく、領域任命理事制度を作つており、今回は4名の領域任命理事の先生に教育講演を行つて頂きました。名古屋大学医学部附属病院 化学療法部の安藤雄一先生、大阪市立総合医療センター小児医療センターの山崎夏維先生、あさか医療センター臨床検査部／東京女子医科大学脳神経外科の小森隆司先生、北海道大学放射線治療学教室の青山英史先生といった本邦を代表する先生方です。非常に密度の高い勉強の場を提供できたのではないかと考えています。風光明媚なところでの学会を楽しんで頂いたのであれば大変嬉しいところです。

発見と創造

第42回
日本脳腫瘍学会学術集会

2024年12月1日(日)～3日(火)

会場 | グランドメルキュール伊勢志摩リゾート&スパ

会長 | 廣瀬 雄一 藤田医科大学医学部
脳神経外科 主任教授

http://jsno42.umin.jp/

第37回 心臓血管外科 ウィンターセミナー学術集会



東海大学医学部
心臓血管外科 教授
長 泰則（69回）

この度、第37回心臓血管外科ウィンターセミナー学術集会を、2025年1月15日(水)・16日(木)・17日(金)の3日間、苗場プリンスホテル（新潟県）にて開催させていただきます。

心臓血管外科ウィンターセミナーは、冬の豊かな自然の中、日本を代表する心臓血管外科医、若手医師のみならず、看護・臨床工学・リハビリ部門・協賛企業の方々など、多職種からの参

加者が集い、心臓血管外科領域の最新のトピックスをリラックスした雰囲気の中で語り合い、情報交換ができるユニークな場であり、30年以上もの確固たる歴史を有する伝統のある学術集

会です。心臓血管外科医の現場は繊細かつ長時間の手術を日常的に行うといったアスリートの要素も強く、心・技・体の修練が必要です。今回は、若手外科医の手術指導を行

う目的の『JSCVS U-40ハンズオンセミナー』も企画しました。当日は、自治医科大学さいたま医療センター山口敦司教授にスーチャレス弁、浜松医科大学 岡本一真教授（78回）にMICS僧帽弁に関する講演をいただいた後に、JAOの先生方の指導で、20名余りの若手外科医がトレーニングに参加しました。

また、前夜祭ではアルペンスキーレーサーの湯淺直樹さんにご講演をお願いしました。湯淺さんは、アルペンスキーにおける独立した世界3大大会（オリンピック・世界選手権・ワールドカップ）の全てで入賞を果たした日本人唯一の選手です。座右の銘は「気合いと根性」とのこと（笑）、働き

第37回
心臓血管外科
ウィンターセミナー学術集会

- Go for the top of the tops -

会期 | 2025年1月15日(水)～1月17日(金)

JSCVS U-40 ハンズオンセミナー同時開催

会場 | 苗場プリンスホテル

*1949-4292 新潟県糸魚川市苗場202

会長 | 長 泰則

東海大学医学部 心臓血管外科

演題募集期間

* 2024年9月1日(日)～11月30日(土)

ホームページ: <https://amarys-jtb.jp/tokai-winter37/>

第27回 Needleoscopic Surgery Meeting を終えて



東京医療センター
浦上 秀次郎（73回）

この度、2025年2月8日土曜日に第27回 Needleoscopic Surgery Meetingを私の地元 三軒茶屋の地におきまして開催致しました。本研究会は2006年に宇都宮でLocalな会として発足し、鏡視下手術の発展に伴い2010年からは年2回開催されて参りました。2020年からの3年間はコロナ禍に伴い、他の多くの社会活動と同様に本研究会も活動が停止致しましたが、ポストコロナの2024年2月に実に4年ぶりに対面で現地開催され、コロナ禍前と同様の開催形態に戻りました。しかし、コロナ禍を経て我々の生活様式は一変し、また海外での軍事衝突、世

mission、先見vision、情熱passionを抱き、そしてそれをどう行動actionに結び付けていくか、そんなことを語り合える場になれば、と考えました。

最後に、この度の研究会開催に当たり、塾内外でご活躍されておられる多くの

刀林会員の方々から多大なるご支援を頂きました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

評議員選挙報告



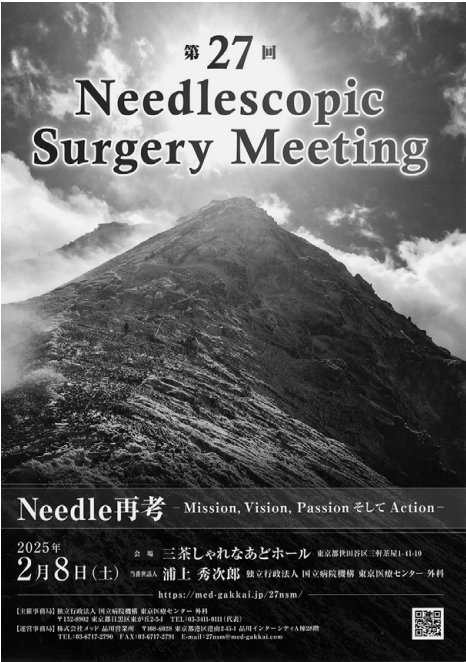
選挙管理委員会 委員長
慶應義塾大学医学部
外科学（心臓血管）
高橋 辰郎（81回）

2022―2024年の一般社団法人慶應義塾大学医学部外科学教室同窓会（刀林会）の評議員の任期満了に伴い、2025―2027年評議員選挙が3月末日投票日切で実施され、以下のとおり計51名（53回以上）の先生方より3名、54回は101回までの先生方

ました。今回は50%弱の投票率でしたが、今回は若干上昇し、60%弱の投票をいただきました。ご協力いただきましたありがとうございます。引き続きご支援賜れますよう、よろしくお願いたします。

慶應義塾大学医学部外科学教室同窓会（刀林会）の2025―2027年評議員選挙当選者（回生順、敬称略）

回生	氏名	回生	氏名	回生	氏名
67	澤藤 誠	68	伊藤 努	101	松川 雄太
66	古川 俊治	69	長 泰則	100	清水 誠仁
65	北川 雄光	70	石井 良幸	99	藤原 弘毅
64	渡辺 真純	71	原田 裕久	98	川本 潤一郎
63	古橋 清和	72	齋藤 淳一	97	方宇 慶蒼
62	浅村 尚生	73	川久保 博文	96	城崎 浩司
61	黒田 達夫	74	北郷 実	95	辻 貴之
60	小澤 壮治	75	藤野 明浩	94	水野 翔大
59	磯部 陽	76	下島 直樹	93	阿部 紘大
58	窪地 淳	77	秋山 武紀	92	蛭川 和也
57	今野 弘之	78	岡林 剛史	91	竹内 優志
56	佐藤 周三	79	松原 健太郎	90	前田 祐助
55	小島 正夫	80	半田 寛	89	今井 俊一
54	竹中 能文	81	朝倉 啓介	88	庄司 佳晃
卒後50年		82	高野 公徳	87	松田 諭
		83	森谷 弘之介	86	田中 真之
		84	和田 剛幸	85	茂田 浩平



サポートして頂いた学会運営会社の方からも、「盛会であったのは先生の企画力と行動力であり、長年多くの医師と学会の企画運営をしているが、先生は特に秀でている」と優しい言葉を頂きました。お世辞とは分かりつつも、会場探し、資金集め、演題募集など、1年超にわたる研究会開催準備の苦勞が報われる思いが



病院紹介

東海大学医学部付属病院



副院長・外科学系長
教授

小柳 和夫（71回）

東海大学医学部付属病院は1975年に診療が開始され、創設50周年記念式典が2025年2月に伊勢原市で盛大に行われました。医学部はその前年の1974年に開講され、旧第1・第2外科合同の外科学教室50周年を昨年2月にホテルオークラでお祝いさせていただきました。刀林会の先生方にはこの場をお借りして御礼申し上げます。

東海大学医学部はその黎明期より慶應義塾大学の支援の下、診療、研究、教育が継続されてきました。現在も多くの慶應医学部出身の先生方が重要な立場で活躍されています。病院執行部には49回一般消化器外科幕内博康先生が顧問として在籍し、病院長には66回整形外科 渡辺雅彦教授、今年度より68回相当脳神経内科 永田栄一郎教授と71回一般消化器外科 小柳和夫が副院長として新たに病院経営に携わっています。さて、30回心臓血管外科 正津晃教授が旧第1外科（心臓、呼吸器）、34回一般消化器外科 三富利夫教授

が旧第2外科（消化器、乳腺、小児）の初代教授として開講された外科学教室は、その後の組織改編により心臓血管外科、呼吸器外科、消化器外科、乳腺外科、小児外科の臓器別の講座体制に移行しました。現在、心臓血管外科、消化器外科、小児外科に刀林会の先生方が在籍し東海大学の外科学診療の基盤としての責務を果たし、地域中核拠点病院として神奈川県央部、西部、湘南エリアの地域医療に貢献しています。心臓血管外科は69回長泰則教授、84回小谷聡秀講師を中心に、神奈川県西部から静岡県東部の広い診療エリアをカバーし、併存疾患を多数有する患者の手術も積極的に行っています。消化器外科は70回山本聖一郎教授（下部消化管）、71回小柳和夫（上部消化管）、86回永滋教准教授（肝胆膵）、88回庄司佳晃講師（上部消化管）の4名が在籍し、各臓器癌の診療、特にロボット支援下手術を標準術式として行っています。小児外科は75回渡辺稔彦教授、83回相当森昌玄助

教が小児に対する腹腔鏡下手術を積極的に推進し、良好な成績を収めています。東海大学医学部付属病院は創設50周年を節目として、「良医の育成」という理念のもと、「先駆ける医学部・付属病院」を目指して様々なプロジェクトを開始しました。この「次の50年」に向けた取り組みを推進するにあたり、顔見知りの先生方が多数いることを非常に心強く感じています。東海大学医学部付属病院のさらなる発展のために、今後も刀林会の皆様のご指導・鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

足利赤十字病院

足利赤十字病院は昭和20年11月に日本医療団足利地方病院として開設され、昭和24年7月1日、日本医療団の解体により日本赤十字社に移管され赤十字病院となつた70有余年の歴史、伝統をもつ病院です。足利市は、栃木県南西部の群馬県との県境に位置し、当院は、隣の佐野市及び近隣の群馬県の市町村（太田市、館林市、桐生市など）を含めた両毛医療圏の中核病院です。平成23年7月1日に渡良瀬川のほとりに全面移転しました。新病院は、一般病床450床（緩和ケア病床19床を含む）、回復期リハビリテーション病床50床、精神科病床40床からなり、患者さんのプライバシーに配慮し快適な療養環境を提供する「一般病床全室個室」が特徴です。新型コロナウイルス感染において個室での療養は感染症拡大のバリエーとなることが証明されることも当院の特徴のひとつです。

平成27年2月に、患者さんにより安全で良質な医療を提供することを最優先事項とする国際的医療機能評価機構JCI（Joint Commission International）の認証を、国内で9番目に取得し、3年ごとの更新を維持し続けております。JCIは、国内では聖路加国際病院や藤田医科大学病院など、約30の施設しか認証を取得できていない大変厳格な審査ですが、この経験を通して職員ひとりひとりが患者さんの安全を第一に考えた医療を実践し、継続的な改善活動を目指しております。

医療技術や医療機器の進歩、新しい治療法の開発は近年目を見張るものがあります。当院ではロボット手術であるダヴィンチをはじめハイブリッド手術室などを備えており、令和5年3月からは最先端放射線治療装置であるサイバーナイフも稼働しました。今後も引き続き最先端の医療を提供して参ります。救急医療に関しては、栃木県では済生会宇都宮病院の次に多い、年間約5000台（県内2番目）の救急搬送を受け入れ、高度急性期医療の一翼を担っています。救急科は、慢性的なマンパワー不足にもかかわらず、断らない救急を掲げ、日々精進しております。しながら当院には、現在集中治療科が無いために、術後管理を、外科系主科で担当しなければならず、外科系Drの負担が増えているのが現状の課題と言えます。働き方改革も始まり、外科系Drの負担軽減は急務と考えており、多角的に集中治療科立ち上げに関し模索しているところです。引き続き慶應義塾大学及び刀林会の諸先生方のご支援をいただけると幸甚です。

一般消化器外科、呼吸器外科、脳神経外科、心臓血管外科が慶應義塾大学より派遣いただいております。一般消化器外科・乳腺外科スタッフは9名（刀林会会員は6名）。高橋孝行（参与60回）、戸倉英之（部長75回相当）、瀬尾雄樹（副部長85回相当）、浜野郁美（85回相当）、武居友子（87回相当）、上田裕貴（101回）。2024年においては、全身麻酔は約820件、腹腔鏡下手術約480件、ダヴィンチによるロボット手術80件、乳腺手術は約170件、緊急手術は約230件でした。呼吸器外科はスタッフ2名。志満 敏行（90回相当）、青木 輝（97回相当）。2024年においては、胸腔鏡下手術115件、ロボット手術約30件、緊急手術は40件でした。脳神経外科はスタッフ5名（刀林会会員は1名）。荻野雅宏（部長67回）。2024年は、全身麻酔164件、緊急手術は約200件、血管内手術は約110件でした。心臓血管外科はスタッフ4名。古泉 潔（部長75回相当）、池端幸起（92回）、金山拓亮（92回相当）、橋本 崇（94回）。2024年は、心大血管手術約200件、ステントグラフト74件、低侵襲心臓手術（MICS手術）は15件でした。各科とも症例が豊富で、ロボット手術、血管内手術等の低侵襲手術も積極的に取り入れており、若手Dr



副院長
古泉 潔（75回相）

のトレーニングにおいては、効率的な研修が可能と自負しております。働き方改革も始まり、また昨今の医療材料費の高騰を受け、外科系Drへのしわ寄せが懸念され、難しい病院経営に直面していることは否めませんが、1・医療DX活用による業務の効率化、2・メディカルクラーク、特定行為看護師等の活用によるタスクシフト

3・休日、夜間緊急手術に対するインセンティブの導入など、外科医を取り巻く様々な職場環境の改善に取り組んで行く所存です。引き続き慶應義塾大学との連携を密に保ちながら、足利赤十字病院の発展に貢献させていただきます。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしく願います。

留学記



林 航輝（93回）

私は2024年8月より米国ボストンにあるマサチューセッツ総合病院（Massachusetts General Hospital, MGH）に留学させていただいております。ボストンは、ハーバード大学やマサチューセッツ工科大学をはじめとする教育・医療機関、さらには医歯薬系企業が集積した学術都市であり、米国国立衛生研究所（NIH）からの研究資金総額は全米で最も多くなっています。中でも、ハーバード大学関連病院の中で最大規模を誇るMGHは、ボストンでも屈指の研究機関として知られています。

私自身は、MGHのCenter for Transplantation Sciences（CTS）に所属し、Alessandri博士の研究室にて研究を行っております。CTSは、16の研究グループおよび約80名の研究者から成る大規模な研究センターであり、マウスだけでなく、ブタ、非ヒト霊長類といった大動物を用いた移植免疫学の基礎研究に加え、臨床応用を見据えたトランスレーショナルリサーチも盛んに行われています。

当センターでは「移植免疫寛容の導入」および「異種移植などによる臓器不足の解消」を2大目標として掲げており、近年では河合教授のグループが、世界で初めてブタからヒトへの異種腎臓移植を成功させたことが大きな話題となりました。

私が所属するAlessandri研究室では、マウスの心・腎移植モデルを用いて、移植免疫のメカニズムの解明や免疫寛容誘導に関する研究を行っております。ボストン周辺には多くの教育・研究機関、製薬・バイオ関連企業が集まっており、当センター内での協力にとどまらず、外部研究機関との共同プロジェクトにも関与する機会をいただいております。

本研究を通じて、移植免疫にとどまらず腫瘍免疫を含む広範な免疫学の知識を深めることができ、また、研究室内および共同研究先である世界各国の研究者との交流、最先端機器の使用など、非常に貴重な経験を積ませていただいております。語学の壁に直面しながらも、世界トップレベルの研究者との議論に食らい

ついでいく日々を通じて、「世界に通用するSurgeon Scientist」を目指し、研鑽を重ねております。研究以外では、定期的に開催されるパーティーやイベントを通じて、アメリカならではの文化にも触れることができっています。また、留学・駐在中の日本人の方々との交流も盛んであり、家族ぐるみでつながりを深めることができいております。

ボストン周辺には歴史的な観光地も多く、また、4大スポーツすべてにホームチームがあるため、スポーツ観戦も盛んで、休日にも充実した時間を過ごしています。家族にとっても、かけがえない経験と記憶となることと思います。

末筆ながら、このような貴重な機会をお与えくださった北川雄光教授、尾原秀明先生、北郷実先生、ならびに刀林会の諸先生方に、心より御礼申し上げます。

この度は「なでしこ外科医」への寄稿という貴重な機会をいただき、誠にありがとうございます。95回相当の石川結美子と申します。私はがん診療がしたいと医師を志し、当初は内科志望でしたが、初期研修で外

科をローテートした際に手術がとても楽しく、今後手術ができない科に行くとは悔ずると思います。外科に入局するに至りました。D3、D4は湘南東部総合病院、水戸赤十字病院で研鑽を積みま

せていただきました。水戸赤十字病院では、昨年急逝された佐藤宏喜先生に乳癌診療の基礎をご指導いただき、多くの乳癌手術を経験させていただきました。いつも明るく多くの患者さんから絶大な信頼を得て、地域の乳癌診療を支えてこ

なでしこ外科医



栃木県立がんセンター 石川 結美子（95回相）

られた姿は、今も変わらず私の目指す乳腺外科医像となっています。大学に帰室してからのレジデント生活は、COVID-19による多くの制限がある中での3年間でしたが、スタッフの先生方や先輩方に多くのご指導を賜り、心より感謝申し上げます。

2023年度よりポストチーフとして現在の栃木県立がんセンター乳腺外科に着任し、3年目を迎えたところになります。ポストチーフになってはじめて、診断、手術、術後補助療法、再発治療、終末期まで一貫して患者さんと向き合うようになり、自分の手術した患者さんが再発した際や、お看取りをした際にはまでのレジデントの時とはまた違った感じ方があり、患

者さんから学ばせていただいているということにより強く感じるようになりました。北関東では乳癌の患者さんが増加する中、地方の乳腺外科医の数は少なく、手術・化学療法を受けられる施設は限られており、地域医療の難しさを実感しています。

これまでも、現在も多くの先生からご指導を賜り、まだまだ未熟ではありますが日々の診療を行っている状況です。諸先輩方に育てていただいた御恩を、患者さんや後輩に還元していけるよう、日々精進してまいります。今後ともご指導ご鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。



東京医療センター 坂本 恭子（95回）

95回生の坂本恭子と申します。寄稿の機会を頂き大変光栄です。医局の女性外科医の紹介のコーナーと心得ていますので、自己紹介と最近の目標を書こうと思います。

出身は岩手県で、2010年に岩手県立盛岡第一高校を卒業・慶應義塾大学医学部に入學しました。2016年から那須赤十字病院で初期研修を行い、201

8年外科学教室に入局しました。レジデント出張は那須赤十字病院、済生会宇都宮病院に出向し、帰室後は腸班に所属し研究活動を行いました。2024年10月より東京医療センターにポストチーフとして出向しています。

資格は昨年消化器外科学会専門医を取得しました。研究では大学レジデントの頃に①大腸癌におけるメトホルミンと放射線照射の相乗効果、②脾湾曲部結腸の静脈解剖、③潰瘍性大腸炎の手術適応予測モデル、の三つを主なテーマとしてそれぞれ原著論文を作成しました。研究を通して、今は3D angiographyの活用と数理モデルの解釈に強く興味をもっています。けれどまだまだ若輩者ですので、今後

も視野広く探求をしていきたいです。

ホルミンと放射線照射の相乗効果、②脾湾曲部結腸の静脈解剖、③潰瘍性大腸炎の手術適応予測モデル、の三つを主なテーマとしてそれぞれ原著論文を作成しました。研究を通して、今は3D angiographyの活用と数理モデルの解釈に強く興味をもっています。けれどまだまだ若輩者ですので、今後

も視野広く探求をしていきたいです。

外科医業と親業は、私にとって時間と精神の陣取り合戦です。三次元の世界に生きていると時間は一方向性だし、精神論としてもアフヘーベンできません。以前、頂いた仕事の関係で、ワークライフインテグ

レーション”が最初に提唱されたと言われる経済同友会の提言書も読んだのですが、未だにどうすればインテグレーションできるのかわかりません。

外科医を続けるなら、今唯一私ができる自分も他人も救える行為は「勉強」しかないと思っています。外科医として理論武装すること、人間として広くリテラシーを身につけること。答えは出せなくても、新しいことを知るたびに人体や社会をみるポイントが少しずつ合うような気がします。もともとのポイントがズレすぎているのかもしれないが、点滴穿石、精進して参ります。今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願

帰室報告



慶應義塾大学医学部
外科学（心臓血管）
准教授

橋詰 賢一（74回）

このたび、志水秀行教授のご高配により、慶應義塾大学外科学教室（心臓血管）に帰室いたしました第74回生の橋詰賢一と申します。

1995年に慶應義塾大学医学部を卒業後、外科学教室に入局し、1998年より川田志明名誉教授、四津良平名誉教授のご指導のもと、心臓血管外科の研鑽を積んでまいりました。その後は上田敏彦先生、志水秀行教授のご指導を賜り、

主に大動脈疾患の診療に従事してまいりました。2003年には、モナコ公国 Centre Cardio Thoracique de Monaco にクリニカルフェローとして留学し、Vincent Dor 教授のもと、左心室瘤

に対する endo-ventricular circular patch plasty、いわゆる Dor 手術を学ぶ機会を得ました。帰国後は、さいたま市立病院を経て、2007年より済生会宇都宮病院心臓血管外科に勤務し、急性大動脈解離をはじめとする心大血管救急疾患に対応してまいりました。

同院では、蜂谷貴先生のご指導のもと、大動脈瘤に対するステントグラフト治療にも注力し、2017年には大動脈センターの立ち上げにも携わる機会を得ました。現在では、年間200例を超える治療を行う High Volume Center として、地域医療に一定の貢献ができたものと考えております。また、学会活動を通じて臨床にとどまらず、全

国の諸先生方との貴重な交流の機会にも恵まれました。このたび帰室の機会を賜りましたこと、ひとえに刀



慶應義塾大学医学部
外科学（心臓血管）
灰田 周史（87回）

この度、志水秀行教授のご高配により、令和7年4月より帰室いたしました、外科学（心臓血管）87回生の灰田周史と申します。

平成20年に慶應義塾大学医学部を卒業し、済生会宇都宮病院にて初期臨床研修、外科学教室に入局後は、専修医として浜松赤十字病院に赴任し、外科医の基礎を学ばせていただきました。

その後、チーフレジデントを務め、都立小児総合医療センターにて小児心臓血管外科を学び、複雑心奇形を含む症例にも取り組みました。平成30年からは、熊谷の県立循環器・呼吸器病センターに赴任しました。同センターは慈恵大学とご縁の深い病院であり、赴任前は緊張もありましたが、心臓外科の織井部長、血管外科の墨部長をはじめ、慈恵大学の橋本名誉教授、國原教授にもご指導を賜り、非常に充実した3年間を過ごすことができました。熊谷はご存じの通り、暑い街であり、在任中には歴代最高気温や、10分間降雨量50mm という日本記録の豪雨を経験したりと、家族には

負担もかけましたが、2019年にはラグビーW杯の試合が熊谷でも開催されるなど、楽しい思い出も多く残っております。

令和3年には再び平塚市民病院に異動し、笠原啓史先生のご指導のもと研鑽を重ね、令和4年より川崎市立川崎病院に赴任しました。在任中の3年間は、大変ありがたいことにチームを率いる立場を拝命し、貴重な経験を積むことができました。

このたび2025年4月より帰室し、大血管浸潤腫瘍治療センターの一員としても活動の場をいただいております。他施設では困難とされるような高度な外科手術にも積極的に取り組み、教室に貢献できるよう全力を尽くしてまいる所存です。まだまだ未熟ではございますが、ご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。末筆ながら、このたびの帰室の機会を賜りました朝倉啓介教授をはじめ、これまでご指導くださった関連病院の先生方、刀林会の諸先輩方に、心より御礼申し上げます。

このたび大学に帰室する機会を頂戴し、これまでに培ってきた経験を少しでも教室に還元できればと願っております。今後とも変わらぬご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。



慶應義塾大学医学部
外科学（呼吸器）
鈴木 繁紀（86回相）

このたび、朝倉啓介教授のご高配により、外科学教室に帰室させていただきました。私は福島県郡山市に生まれ、2007年3月に福島県立医科大学を卒業後、国保旭中央病院にて2年間の初期

臨床研修を行いました。その後、東京都立駒込病院にて3年間の後期外科研修を経て、2012年4月より慶應義塾大学医学部外科学（呼吸器）に入局いたしました。入局後は慶應義塾大学病院にて3年間のレジデント研修を行い、その間、国

立がん研究センター東病院への国内留学の機会をいただきました。東病院では病理診断および肺腺癌の微小環境に関する研究に取り組み、2018年10月には本研究にて慶應義塾大学より学位（医学博士）を取得させていただきました。20

15年4月からの1年間は、浅村尚生前教授のご高配により、国立がん研究センター中央病院にてチーフレジデントとして研鑽を積み上げていただき、手術に明け暮れる貴重な経験を得ることができました。その後、2016年4月より相模原協同病院へ出向し、3年間副部長として、以降6年間は部長として、年間200件前後の呼吸器外科手術を担当してまいりました。臨床では、肺癌を中心とした呼吸器外科全般を取り扱い、拡大手術に積極的に取り組んでまいりました。また、縮小手術として単孔式胸腔鏡手術も導入し、低侵襲治療の推進にも努めてまいりました。研究面では関連施設との多施設共同研究にも従事し、論文として成果を報告する機会も得ました。



帰室報告



慶應義塾大学医学部
外科学（一般・消化器）

門野 政義

（93回）

このたび、北川雄光教授のご高配により帰室いたしました93回生腸班の門野政義と申します。私は2014年に慶應義塾大学を卒業し、足利赤十字病院での初期臨床研修を終えて慶應義塾大学医学部外科学教室に入局いたしました。公立福生病院、済生会宇都宮病院への出張を経て、2018年に大学レジデントとして帰室し、腸班に所属いたしました。学生時代のポリクリでもご指導いただいた岡林剛史先生をはじめとした腸班の先生方にご指導いただき、腸班としての臨床と同時に、清島亮先生のご指導のもと、基礎研究として大腸癌肝転移における線維化肝の役割に関する研究を行いました。

術に入ることも多く、当時、同病院の救急医であった現在の妻が開胸心マッサージをしながら私が開腹するといった特別な経験もございました。栃木医療センターでは、田村明彦先生、鈴木慶一先生、橋本健夫先生、尾曲健司先生にあたたかくご指導いただきながら、大腸外科医として日々の診療に取り組んでおりました。2024年10月から帰室し、腸班としての臨床、研究、教育に取り組んでおります。大血管浸潤腫瘍治療センターの症例に腸班として積極的に取り組む、手術支援AIの開発に携わる、腹腔鏡手術、ロボット手術の技術評価システムの確立を行う、とさまざまなことに貪欲に取り組む、慶應義塾大学外科学教室の発展のため全力を尽くす所存です。帰室する機会を与えてくださった北川雄光教授および尾原秀明先生、岡林剛史先生、これまであたたかくご支援助くださった関連病院の先生方、刀林会の先生方に心より御礼を申し上げます。今後ともご指導ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。

近況報告

57回生



上野 滋

（57回）

ふるさとの岡山に居を移し、岡村一心堂病院という病院に勤めています。「零歳から百歳まで」をモットーに、小児外科医としての経験を生かした乳幼児慢性便秘症の治療、生活習慣病や透析患者の管理、超高齢者の終末期医療など総合診療医として過ごしています。休日には読書、ジム通いと短歌づくりをしています。今年は第二歌集を出版するつもりです。家族・親族、

町内会や歌会、小中高大学の同級生、同門の皆様との集いや再会を楽しんで過ごしています。三田会や三代会を通じて母校卒業生の方々とも交流を深めたく思っています。近くにお出かけの折はご連絡ください。夏の宵値千金ルボンヴィヴァン若き日辛き日今の日語る



奥澤 星二郎

（57回）

多くの方々からご支援を賜り、半世紀近くの間、関連病院で勤務を継続しています。古希を過ぎ、多忙な外科を離れ、ピンピンコロリを実践すべく、生涯現役を目指し、2年前から、職住近接の環境下、平日は古巣の済生会神奈川泉病院（横浜）で予防医療の業務に励み、週末は妻とのんびりリフレッシュするという穏やかなワークライフバランスを保っています。衰えつ

つある体力は、今のところ、気力と週3回のフィットネスジム通いでリカバーしています。愛犬との散歩や趣味のDIYにも小さな生きがいを感じるようになりました。過去や未来を思い悩むことなく、感謝の心を忘れず、今という時を大切に、自分らしく生ききたいと願っています。莫妄想。



栗原 博明

（57回）

大森で開業しまして、20年になります。光陰矢の如し。周りの病院と、病院連携を通じて、仲良くさせてもらっています。昨年、クリニックのビルが老朽化のため、取り壊しとなり、近くに引っ越しました。クリニックも新しくなり、まだまだ頑張らなくては感じています。

この20年で、医療の電子化が進み、いろいろな手続きが、すべてインターネッ



洪 淳一

（57回）

1984年5月に埼玉社会保険病院（現JCHO埼玉メデイカルセンター）へ赴任して22年、その後乳腺専門クリニックを開設して18年、一貫して乳腺外科医として診療してきました。開業後も近隣のさいたま市民医療センター（慶應関連施設ではありません）のオープンベッドを利用して乳がんの手術を行い、外科医として恵まれた環境でした。しかし加齢による心身

の衰えを自覚してきたため、2024年12月に元東京医科歯科大学乳腺外科講師の先生にクリニックを譲渡しました。現在は週2回午前だけ診療を手伝っています。有り余る自由時間に戸惑うこともありませんが、散歩や水泳、卓球など、体を動かすことを心掛けて過ごしています。



貞廣 莊太郎

（57回）

東海大学を定年退職後、同じ医療圏内の新築予定の小病院へ移りましたが諸般の事情あり、1年半後突然閉院となり、近隣の別の小病院へ移りました。現在は非常勤医として外来のみ2日間。主に東海大での患者さんを診て、肛門外来もしています。また東海大に在職時代私が主治医だった先生に誘われて、先生が診療している宮城県石巻市の診療所で2日間肛門／便秘外

来をしております。東海大では大腸癌の手術、集学的治療に明け暮れていましたが、元々医学部志望の動機だった市井の医師となり充実しています。実地臨床の中で気づいた課題について1・2年に1編英文で投稿することが目標です。



森 俊治

（57回）

ポストチーフ出張で静岡日赤に赴任して定年まで34年間勤めました（専門は肝胆臓外科）。口うるさくない上司に恵まれ、のびのびと働くことができました。腹腔鏡下手術を導入する際に故大上君の指導を受けたのが昨日の日のようです。2018年4月からメスを聴診器に持ち替えて、静岡医師会健診センターで常勤医として働いています。診察や読影（胃X線検査、

マンモグラフィ、腹部超音波検査）に明け暮れる毎日。週に1日は静岡日赤の健診センターで経鼻内視鏡検査と読影を行っています。その他、2001年から静岡県国民健康保険診療報酬審査委員（副会長）を務めてきました。多忙ですがストレスの少ない生活をしています（家内も元氣です）。

エッセイ

日本写真学会論文賞を受賞して



杏林大学名誉教授

伊藤 泰雄 (47回)

この度、日本写真学会論文賞を受賞しました。対象となったのは日本写真学会誌(2024年)に投稿した論文「顔認証技術を用いた古写真の人物特定『フルベッキ写真』への応用」(<https://doi.org/10.11454/photogst.87.148>) です。ギドー・H・フルベッキは幕末から明治時代にかけて長崎に滞在したオランダ人宣教師で、佐賀藩の英語

藩校「致遠館」で伊藤博文、大隈重信らを教育した人物として知られています。「フルベッキ写真」とはフルベッキ親子を中心に44名の侍が集う写真です(写真)。この写真には、西郷隆盛、坂本龍馬ら幕末の志士が写っているとの論文が昭和49年に雑誌「日本歴史」に発表されました。その後、出所不明のまま全員の名前が当て

はめられ、「幕末志士の集合写真」として流布するようになりました。一方、写真は長崎の上野彦馬のスタジオで撮影されており、スタジオの背景から明治維新後に撮影されたとする研究もあり、論争が続いていました。

そこで私は「フルベッキ写真」中の人物を客観的に特定する必要性を感じ、AIを用いた顔認証技術を用いる

ことにしました。顔認証にはAmazon Rekognition®を用い、写っている可能性が高いとされる岩倉具視の二人の息子や佐賀藩出身者の写真を対照として、「フルベッキ写真」中にいるかどうかを検討しました。その結果、「フルベッキ写真」中に岩倉兄弟の他、佐賀藩出身者10名を特定することができました。一方、西郷隆盛、坂本龍馬、勝海舟、伊藤博文、桂小五郎ら幕末の志士はいないことも明らかになりました。

学会賞受賞は、古写真研究に顔認証技術を応用したことが評価されたものだと思います。一般の人から「お医者さんがなぜ古写真に興味持ったのですか」と聞かれることがあります。「古写真の人物を画像解析で特定する作業は、病気を画像で診断することとあまり変わりません」と答えています。詳細は昨年5月発行の慶應義塾医学部新聞「異能の人々―古写真研究」に書きましたのでお読みいただければ幸いです。



慶應義塾大学医学部41回生、池田高明先生におかれましては令和7年1月16日にご逝去されました。ここにあらためて追悼の意を表します。

池田高明先生は昭和37年慶應義塾大学医学部を卒業され、慶應義塾大学外科学教室に入局、昭和50年、都立駒込病院が新病院になり、呼吸器外科医として赴任され、都立駒込病院副院長を務められた後に、平成10年より平成14年まで都立大久保病院院長を務め、退職されました。

慶應義塾大学外科学教室からは酒井忠明先生(46回)、加勢田静先生(53回生)が赴任され、3名で都立駒込病院呼吸器外科を運営されていきました。昭和56年12月より酒井章次(57回)が加勢田静先生の後任として赴任し、2年間余りを池田先生から呼吸器外科医として、また医師として薫陶を受けました。その後、菊池功次先生(55回)、水渡哲史先生(55回)、西村先生(56回)、堀之内先生(61回)が赴任しました。池田高明先生は酒井忠明先生と若手呼吸器

外科医の3名で、都立駒込病院呼吸器外科を運営してこられました。都立駒込病院は都立がんセンターとして、症例数が多く、私のようなかけだしの呼吸器外科医にとつては、有意義な修練の場となりました。池田高明先生は通常の手術症例はもとより、切除困難と思われる症例にも果敢に挑戦され、成功を収めておられました。呼吸器外科習練中の自分たちにとってこれらの手術症例はかけがえのない経験となり、以後の呼吸器外科医としての診療に大いに役立ったと思います。

池田高明先生は富山中部高校、自分は富山高校と出身高校は異なりますが、ともに富山県の出身でした。池田先生の奥様も富山県出身であり、そのためか、池田先生の話しぶりは一見、標準語のようでありましたが、イントネーションは富山なまりであって、自分にとっては、池田先生とお話しているときは、富山県に帰省しているような気分であることができました。とても懐かしく思い出されます。

追悼記

池田高明先生を偲んで

済生会横浜市東部病院サルビア 施設長

酒井 章次 (57回)

ます。

この稿に載せた写真は、石原先生率いる呼吸器外科研究室(当時は肺外科研究室と称していました)に所属するほぼ全員が集合する、熱海でのゴルフコンペに伴い行っていた、呼吸器外科夏の会での集合写真です。毎年行っていました。これは、約40年前に撮影したもののようなです。浴衣姿で大変恐縮ではありますが、当時の呼吸器外科研究室の重鎮がそろっておられ、貴重な写真で、懐かしかったので掲載させていただきます。池田高明先生は最前列、向かって右側です。



前列左より、山崎(41)、菊池(40)、石原(30)、草島(Ns)、柳内(40)、池田(41)、2列目:酒井(57)、水渡(55)、鈴木(54)、3列目:菊池(55)、秘書、秘書、深井(49)、武士(52)、小林(46)、根本(56)、加藤(59)、加勢田(53)、野守(58)、井上(48)、酒井(46)。

追悼、 愛すべきでたらさん、ありがとう

北里大学名誉教授
西麻布メディカルクリニック院長

渡邊 昌彦（58回）

愛すべき先輩寺本龍生先生、「でたらさん」が逝ってしまった。日々、短期記憶障害に悩まされる私でも、でたらさんとの思い出はありすぎて紙面が足りない。

でたらさんは1980年に足利日赤から英国St.Mary's病院での留学を経て大学に帰室され、小平進先生とともに腸班を率いていた。私は1982年にその新生腸班の一員に加えてもらって以来、文字通り公私ともにでたらさんの弟子として今日に至っている。とくに小平先生が帝京大学に移られてからはでたらさんと私のツートップで、腸班の愉快な仲間と青春の日々のような大学生生活を送らせてもらった。でたらさんは細かいことは気にせず、部下の自由を損なわない少なくとも私にとって理想の上司であり続けた。とくに、私が始めた腹腔鏡下手術を「この手術は僕に向いてないから、なべちゃんが好きにやって」と応援してくれた。上司が、当時の中堅大腸外科医としては珍しい柔軟性を持ち合わせていてくれたことが、私の幸運であった。今も感謝の言葉が見つからない。

でたらさんは手術が大好きで、とりわけ直腸がんの肛門温存手術がライフワークとし、ご自身で経肛門吻合用持針器（T式持針器®）まで考案した。コロナ班のメンバーは、チーフ終了時にでたらさん自身からT式持針器を贈られるのが恒例であった。その後、教え子達が出たT式持針器で大活躍すること、きつと楽しみにしていたに違いない。大腸肛門病に関する数多の業績や学会活動が認められて東邦大学教授に栄転された後、日本大腸肛門病学会会長や理事長を務めたことは周知の事実である。

でたらさんは文武両道。尺八の名手で、事あるごとに私たちは傾聴させられた。ゴルフの好きなたでたらさん、ドライバークラッシュ前の畑を耕すようなポーズが皆忘れられないはず。そういえば、でたらさんの机の下にはいつも黒の競泳用パンツが干してあった。千駄ヶ谷のプールでひと泳ぎ、これがどうやら健康の秘訣だったらしい。でたらさんはお酒も大好き、腰痛のためゴルフができなくても宴会には必ず現れた。いや、お酒では

なく腸班の仲間の顔が見たかったのだろう。よく自宅に腸班の仲間を呼んでパーティーを開き、奥様が素晴らしい手料理をふるまってくれた。とくにローストビーフは最高だった。幼稚園の私の子供達を連れてご自宅にうかがった時のこと、しばらく姿を消していたでたらさんが、突然屋根裏から埃まみれで戻ってきた。子供たちのために、息子さんや娘さんがかつて遊んだ玩具を探しに行っていたのだった。

温かくて、人懐こくって、憎めない人。手術が好きで、友人を愛し、後輩を可愛がり、全力で家族を愛した人。人生の達人、でたらさん、素敵でした。



稲垣宏先生を偲んで

祝井 文治（58回相）



外科学教室から、稲垣宏先生の訃報が入った。毎年賀状をいただいておりますが、お元気に過ごされておられるとばかり思っていたので、戸惑い、一瞬、時間が止まったような感覚を覚えた。

四十数年前、フレッシュマン二年目を、国立霞ヶ浦病院外科で過ごした。そのときご指導いただいた先生のお一人が、稲垣宏先生であつた。卒業後十年を過ぎた先生は、手術、診療、そして私たちの指導に日々精力的に取り組んでおられた。

手術中、解剖の質問に答えられない。一言、「そんなことも知らないで手術に入っているのか。」それならばと、次に問われたとき、あやふやながらも何とか答えると、「どこにそんなこと書いてあった。」

手術が終わり、病棟で術後指示と術記事を書いていたら、

「どうだ、何か問題があるか。」「ありません。」「で、何をしてくれるんだ。」「はい手術記事を。」「次の手術、始まっているぞ。」「……」「それを書くのと、今やっている手術を見るのと、どっちが

大事だ。」「……強烈な一撃であつた。

一年近く経った休日当番の日、腹痛の患者さんが来院した。診察、検査の後、先生に「七十歳男性、虫垂炎、手術が必要だと思えます。」

「どんな感じだ。」「経過、痛み、の所見など一通りの所見を述べると、」「よし、じゃ、やつとけ。」「はい。」「ところで、体温はなんぼだ。」「……測っていません。」「体温測らないでアッペと診断する医者、どこにいる。」

手術室で、麻酔をして：「先生は姿を現さない。看護師さんいわく、「前の先生はどんなに進めていましたよ。」しかし、手術が進んでも姿が見えない。が、看護師が何か笑っているような気がする。終了。私「先生来なかったね。」看護師さん「ちゃんといらして、終わるまでドアの窓から覗いていましたよ。」

翌日、体温の事を詫び、昨日来て下さっていたことにお礼を言うと、「よし。いちおうよし。」そして「昨日のことは合格。ただ、これで自分はおアッペが出来るようになったとは思ふなよ。

夜中に自分しきいなき、自分一人で診断し、看護師一人を助手に手術できたとき、自分はできたと初めて言えるんだ。」

今でも、あの張り詰めた手術中の雰囲気、先生に話すときの緊張感を思い出す。相談したくても、もう少し自分で考えてから、こんな知識ではいけない、と思わせられるフレッチャー。いくら追いつこうとしても敵わない、豊富な知識。それでも後半になると、極めてまれに、「よし、言うことなし。」率直、嬉しかった。

臨床の様々な場面で、何が正しいかを自分の頭で判断し、行う。結果が悪ければそのとき徹底して反省する。そのことを、先生は繰り返しておっしゃられた。白黒がはつきりしている先生。ときに厳しく、一方では常に心の奥に優しさを秘めた、闊達豪放な先生。本当にありがとうございました。

謹んで哀悼の意を表し、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。



診療体系グループ紹介

小児外科



慶應義塾大学医学部
外科学（小児）教授
藤野 明浩（75回）

2023年4月に外科学（小児）教授を拝命した藤野明浩（75回）と申します。就任後、早2年が経過しました。現在の小児外科教室を紹介させていただきます。

慶應小児外科は、1960年代より諸先輩の先導的な活躍により発展し、2025年に一般・消化器外科から独立して約20年が経過しています。現在では、黒田達夫（神奈川県立こども医療センター総長、61回）、浮山越史（杏林大学教授、65回）、淵本康史（国際医療福祉大学教授、66回）、平林健（弘前大学教授、67回）、渡邊稔彦（東海大学教授、75回）、日比泰造（熊本大学教授、77回）、下島直樹（国立成育医療研究センター診療部長、76回）、富田紘史（東京都立小児総合医療センター医長、84回）、大野通暢（さいたま市立病院部長、80回）、小林めぐみ（NHO栃木医療センター医長、86回相）と、多くの小児外科部門あるいは小児病院の責

任者を同門者が務め、順に日本小児外科学会の理事、学術集会会長、各種委員会委員長・委員を務めるなど日本の小児外科を牽引するメンバーとして活躍しています。

本学内では、大学の使命である、先進医療の提供、研究・学問の推進、学生そして医師の教育をスタッフがよく自覚し、それぞれの得意領域を拡充しています。肝・小腸移植領域は、現在は山田洋平専任講師（81回）を中心として関連する胆道閉鎖症その他の小児の肝疾患や腸管運動不全・短腸症候群の難治性患者の最後の砦として積極的に高度な診療を進めています。特に腸管リハビリテーションセンターとして多診療科・多職種でのチームを形成し、小児から成人まで腸管不全疾患に対して大きなチームで患者ニーズに合わせた医療の提供と研究に取り組んでいます。また加藤源俊助教（86回）を中心に、大学病院

血管腫・血管奇形センターのリンパ管疾患部門をリードしております。全国から小児に留まらず重症・難治性のリンパ管疾患患者が集まって来ており、新規薬剤の臨床治験、特定臨床研究なども進めつつ最新医療を提供しています。またDSセンターでは鎖肛の一病型で難病指定されている総排泄腔疾患を中心としてイニシアチブをとって他院より困難例を紹介頂き外科的治療に取り組んでいます。小児がん領域では狩野元宏助教（86回）が国際共同研究を含め特に胚細胞腫瘍領域で日本の中心を担う活躍をしています。

そんな当教室では、最近4、1、3名と毎年コンスタントに入局者を迎えています。これは小児外科領域のやりがい、興味深さがよく知られるようになってきたとともに本学諸先輩の切り開いた道を通って活躍の場を得ることを望む若手が増えていることを示します。

少子化が進む中、全国での手術総数は減少が顕著ですが、まだまだ難治性稀少疾患が数多く残っています。今後も教室員一同、慶應小児外科は何をなすべきかを常に念頭に置きつつ、世界を先導すべく研究・教育に務め、一方で、笑顔と幸せを求め、こどもを中心とした全ての患者さん、そのご家族に寄り添った優しい医療を、誇りをもって進めて参ります。

引き続き、刀林会の皆様のご支援ご鞭撻のほどを何卒宜しくお願い申し上げます。

呼吸器外科



慶應義塾大学医学部
外科学（呼吸器）教授
朝倉 啓介（81回）

呼吸器外科は2025年度から6名のスタッフ（朝倉、加勢田専任講師、政井専任講師、鈴木繁紀学部内講師、大久保助教、鈴木嵩弘助教）と5名のレジデントで診療を行っています。当科の強みを5つご紹介します。第1は胸部悪性腫瘍に対する拡大手術で、心臓大血管の合併切除やサルベージ手術などの症例が関東一円から集まるようになっていきます。第2は加勢田専任講師が担当する胸部悪性腫瘍に対する凍結療法で、これは大学病院の中で慶應だけが行っている低侵襲治療です。現在は患者申出療養（混合診療）で行っています。第3は政井専任講師が担当している漏斗胸で、全国最多の成人症例手術を行っております。第4は24時間気胸ホットラインで、近隣医療機関から好評をいただいて気胸症例は増加傾向です。第5はがんゲノム

医療で、臨床研究あるいは自費診療として肺癌や転移性肺腫瘍に積極的にゲノム検査を施行し、術後補助療法や再発治療の選択に役立っています。

各種の取り組みが奏功して、2024年の手術件数は過去最多の640件（前年比50件増）となり、2025年前半もそれをさらに上回るペースで手術を行っています。今後は、慶應呼吸器外科が伝統的に得意としてきた感染症の手術や、気道ステント等の気管支インターベンションにも改めて力を入れていきたいと考えております。外科学教室のチームワークと慶應義塾大学病院の総合力を生かした質の高い外科治療を提供してまいります。

新入局者のリクルート、レジデンシー終了後の研鑽、症例の紹介、臨床研究への参画、大学所属者の外勤など、関連病院を中心とする刀林会の先生方の多大なるご協力によって、当科の診療・研究・教育は支えられております。刀林会の先生方におかれましては引き続き当科にご支援を賜りたく何卒宜しくお願い申し上げます。



開業

心臓クリニック横浜三ツ沢

1991年に慶應義塾大学外科研修医として外科の世界に入ってから、開業のことは全く考えず、心臓血管外科の中でも最もつぶしの効かない先天性心疾患の世界に入り込み、その後、教室人事の関係で、徐々に成人の心臓血管外科医に移ってきた経緯があります。その間に何となく将来のために循環器専門医を取得したことが現在役に立っています。2015年に1年間だけ慶應義塾大学病院に帰室し、久々に先天性心疾患のチームとして働いた事が、今では良い思い出になっています。翌年自衛隊中央病院からの要請もあり、当時埼玉病院で部長をされていた林一郎先生が自衛隊中央病院の心臓血管外科部長となり、私が隣にある三宿病院の心臓血管外科部長として、協力して自衛隊中央病院での心臓手術を行うこととなりました。途中コロナ禍などありましたが、チームとして軌道に乗っているなか、林先生が定年退職になり、自宅で開業されたのを見て、引退後に開業する

のいいかなと考えるようになり、元防衛医大心臓血管外科准教授で、心臓クリニック藤沢六会を開院された磯田晋先生（現「医」爽心会 理事長）とお会いする機会があり、循環器クリニックの2号店を出す予定とのことでしたので、私としてはまだ定年まで2年ほど残っていました。音が、そろそろ引退もありかなと思いつ、爽心会の元で開業する決意をしました。まずは、開業の候補地選びでしたが、これがかなり大変な作業でした。磯田理事長のご経験から候補地の条件がいくつかあり、これをクリアする物件がなかなか無く、結局今のテナントを探すまで10ヶ月程度を要しました。ただ、本来一番大変な業務である資金繰りについては理事長にお任せできました。そのため非常に助かりました。続いて設計士さんと内装設計の打ち合わせを行い、広さに制限もあるため、調整するのに苦労しました。職員の募集については理事長が行ってくださいました。医療とは関係ない資格として、防火管理者（甲種）も必要でした。X線装置、超

音波装置、心電図、トレッドミル等の医療器械は理事長が決定しましたが、その他のクリニックの備品は私が調達しました。物件の引き渡し後、3週間でクリニックを機能させる必要があったため、この間はほぼ休みなく準備を行いました。内覧会の日には各方面から胡蝶蘭の鉢をいただき、非常に有り難く思いました。現在、開院後半年が経過し、まだまだ患者数が少ないですが、今後も丁寧に診療を行い、地域医療に貢献していきたいと考えます。心臓クリニック横浜三ツ沢をどうぞ宜しくお願いします。



心臓クリニック横浜三ツ沢

■循環器内科 ■心臓血管外科 ■内科

診療時間	月	火	水	木	金	土	日	祝
9:00～12:00	●	●	●	—	●	●	●	●
15:00～18:30	●	●	●	—	●	—	—	—

休診日 木曜終日／土・日・祝祭日の午後
(臨時休診日はホームページをご確認ください)

TEL:045-577-1017





加島 一郎（70回）

横浜フロント脳神経外科・泌尿器科



市村 真也 (81回)

横浜フロント脳神経外科・泌尿器科は横浜駅直結徒歩3分の横浜フロントタワーに2024年5月開院いたしました。私が院長を務める医療法人社団慶真会川崎中央クリニックの分院です。

当院のあるヨコハマフロントクリニックモールは日本初の国家戦略都市計画建築物等整備事業として整備されたクリニックモールです。外国人の患者さんに対応する多言語での診察に対応するために、海外留学経験あり英語で診察をできる医師や海外での勤務経験のある看護

師や事務スタッフが当院には勤務しております。院長には脳神経外科専門医とファッションデザイナーの二刀流でマスコミにも多数出演している折居麻綾先生(Dr. まあや、79回相当)を迎え、脳神経外科と泌尿器科の両科で女性医師による

診察を行う診療体制を取っています。開院から約1年が経過し2025年4月からは泌尿器科を拡充し両科が毎日外来を行う体制となりました。脳神経外科では頭痛、めまい等の一般的な脳神経外科疾患の治療から、気象病

や乳児向けの頭蓋骨矯正ヘルメット治療などの当院ならではの特殊な治療も行っていきます。泌尿器科では特に女性泌尿器科専門医による診察が好評でたくさんの方の女性患者さんにご来院いただいております。川崎本院とは密に連携と取っており、MRIや入院の必要のある患者は川崎本院に転送したり、横浜での通院を希望される際は横浜院に紹介をしております。手術が必要な患者さんは近隣にある済生会横浜市東部病院などの関連病院に紹介して地域医療に貢献しております。



開院当日にて (左 Dr. まあや 右 市村真也)

はれにこキッズクリニック



藤村 匠 (86回相当)

このたび、2024年11月1日に札幌市南区に「はれにこキッズクリニック」を開院いたしました。こどもたちが「晴れの日のように、ここに元気に過ごせるように」との願いを込めて名付けた当院は、地域に根差した小児科クリニックとして、日々の診療にあたつて

おります。乳幼児から思春期までの急性疾患、小児アレルギー、便秘外来、予防接種に至るまで幅広く対応し、地域の子育て家庭にとつて安心して相談できる「かかりつけ医」となることを目指しています。

私は岩手医科大学を卒業後、慶應義塾大学医学部外科学(小児)に入局し、関連施設を含む関東圏の医療機関を中心に、臨床・研究に励んでまいりました。新生児外科、消化管手術、移植医療など多岐にわたる症例を経験し、術前から術後の長期フォローに至るまで一貫して患児・ご家族に関

わる中で、急性期医療と地域医療をつなぐ橋渡しの重要性を強く感じるようになりました。特に、術後の患者さんが地域で適切なフォローを受けられない状況に直面する中で、地域における小児外科の役割を改めて認識するようになりました。こうした経験を重ねる中で、医療

者としての原点に立ち返ったとき、本籍地でもある北海道の地で、地域のこどもたちとご家族に向き合う医療を提供したいという思いが芽生え、開業という決断に至りました。開業から半年が経ち、月間の診療件数も1,200件を超え、休日診療当番日には130名を超えるお子さまに対応できるようになってまいりました。今後は、月間診療件数1,500件および分院展開を目標に、少子化で後退しつつある地域の小児医療を支えてまいります。

末筆ながら、これまで私の臨床・教育・研究を温かくご指導くださった慶應義塾大学医学部外科教室の皆様、心より感謝申し上げます。また、小児外科専門医・外科指導医の資格を

取得させていただき、まさにこれから教室の診療を担う立場になりつつあった私の開業という大きな決断を、深いご理解のもとでお許しくださった藤野明浩先生のご厚意に、改めて深く感謝申し上げます。海を隔てておりますので気軽には申し上げにくいですが、札幌にお越しの際はぜひお声がけください。今後も刀林会の皆様のご指導を賜りながら、地域医療の現場で誠実に診療を重ねてまいります。引き続き、何卒よろしくお願い申し上げます。



クリニックHP



